成人一人一人が自覚する場

成人式には「成人を迎えた若者を祝う」という目的の他にも大切な意義がある。新成人一人一人が権利、義務、責任など「社会の一員になったこと」を自覚し、気持ちを引き締める場でもある。

本町で開かれる成人式では一貫してその目的や意義が守られてきた。新成人は節度を持って式典に臨み、厳粛な雰囲気で式が進行していく。それぞれの表情には、新成人としての自覚と感謝の心がしっかりと見てとれる。そんな、他に誇れる成人式が毎年、連綿と受け継がれてきた。

しかし全国を見渡してみると、決してそんな式典ばかりではない。「私語をやめない」「不必要に騒ぎ立てる」「携帯電話で大声で話す」「飲酒しながら参加する」「会場内で暴れ回り、式典の進行を妨害する」などのケースが毎年のように問題になり、テレビや新聞をにぎわせている。逮捕者が出るほどエスカレートした式典もあるほどだ。

全国に見る「行き過ぎた式典」

1999年 仙台市ではエジプト考古学者の吉村作治氏が講演した際、新成人のマナーの悪さに激怒したという。

2001年 高松市では新成人男性5人が、当時の市長に向かってクラッカーを打った。那覇市では新成人の一部が市街地でどんちゃん騒ぎ。2002年を最後に市主催の成人式は取り止めとなった。

2003年 姫路市では式典終了後に新成人の集団が喧嘩を始め、止めに入った警察官2人に暴力を加えた。

2004年 伊東市では、新成人6人が式典を妨害し市側が告訴に踏み切った。

2010年 半田市では一部の傍若無人な新成人が羽織はかまで日本と韓国の国旗を持ち出し、銅像の上に乗ったり、クラッカーや打ち上げ花火などを使って騒いだ。

成人式の七五三現象

外面的には着物で豪華に着飾っていても、内面的には大人になりきれていない。他人の迷惑をかえりみず、行き過ぎた行為に走ってしまう。結果、本来一人前の大人として決意すべき場である成人式が、かえって若者のモラル低下を露見させる場となってしまう。このような現象を「成人式の七五三現象」という。

成人式は「新成人を祝う」ためだけの式典ではない
これまで見守り育ててくれた人たちに、心を込めて感謝を伝える場でもある
大人としての義務と責任を自覚し、希望を胸に一歩を踏み出すときでもある

特集2【エール】

Yell

【新成人たちに贈る賛歌】

特集の終わりに【取材を終えて】

終戦間もない頃に始まった成人式。昭和21年、埼玉県蕨町（現蕨市）では、敗戦に打ちひしがれた若者を、地域住民が何とか励ましそうと「青年祭」を開いた。この催しが原型となって全国に広まり、現在の「成人式」に発展したのだ。成人式発祥の地である蕨市の蕨城址公園にはそれを記念した碑が立ち、今も全国の若者たちを見守っている。

晴天に恵まれた今年の成人式。会場には笑顔があふれた。久々の再会。思い出話にも花が咲く。仲間同士で撮影する記念写真。白い歯がこぼれた。和やかなムードが、祝福する保護者や来場者の心をも温かくした。

「荒れた成人式」がメディアをにぎわせるようになったのは、いつのころだったか。「酒を飲み騒ぎ立てる」「ステージに上がり来賓に悪態をつく」「暴れて喧嘩を始める」…。そんなニュースが流れるたびに、「またか」と思った人も多いだろう。晴れの門出であっても、とても「祝福」を贈る気になんてなれないはずだ。

愛情と人情が育て上げた成人式

本町の成人式を見つめて5年になる。毎年、若者たちが自覚と感謝を胸に、希望に満ちた表情で一歩を踏み出していく。その姿を、いつもすがすがしく思ってきた。ここには暴れ回る者も、悪態をつく者もいない。どの成人も、実にいい顔をしている。都市部で開かれる式典のような派手さはないものの、ここほど会場が一体となった、アットホームな式典は珍しいのではないかとさえ思う。大池幸男県議が述べた祝辞にも、そのことが表れていた。

新成人たちが幼い頃から、家族や恩師、地域の人たちが惜しみなく注いできた愛情。目をかけ手をかけ声をかけてきたあふれる人情。そんな温かな地域の「土壌」があるからこそ、節度ある若者がはぐくまれ、連綿と受け継がれる「成人式」が育てられてきたのではないか。

誰の心も温かくなる成人式。それはこの町の誇りだ。

支えてくれた人たちに感謝を贈り、
惜しみなく降り注ぐ拍手に、感動を覚えた今日という日
君たちが今、胸の内に抱く「決意」こそ町の誇りだ
夢へと歩む途中で、悩んだり迷ったりしたら、思い出してほしい
この町には、君たちを見守り支える、いくつもの手があることを
踏み出す足の先に、真っ直ぐに続く、未来への道が見える